”先制医療”の概要と関連する主な施策動向等

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2015-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 真博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2823

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2014 年 第 3 巻 第 1 号　11 頁

【教育講演Ⅰ】
“先制医療”の概要と関連する主な施策動向等

独立行政法人　科学技術振興機構　研究開発戦略センター
辻　真博

独立行政法人　科学技術振興機構　研究開発戦略センター（JST-CRDS）は、JST に 2003 年 7 月に設立された組織であり、科学技術全体（ナノテク・材料、環境・エネルギー、情報科学、ライフサイエンス、臨床医学など）の俯瞰、国内外の研究開発動向の比較、社会的期待の把握、及びそれらに基づくわが国で推進すべき研究開発戦略を立案している（参照：http://www.jst.go.jp/crds/）。 平成 23 年度、JST-CRDS 臨床医学ユニット（井村裕夫首席フェロー（当時））において、わが国の健康・医療に対する社会的期待を検討したところ、主に国民の健康向上、医療費・介護費高騰への対応、産業の活性化などが重要であり、これらを可能な限り同時に達成することが科学技術に強く求められていると考えられた。先進国、途上国を問わず世界共通の大きな課題となりうるいくつかの疾患（アルツハイマー型認知症、2 型糖尿病、骨粗しょう症、がんなど）について検討を重ねた結果、「先制医療」というコンセプトの重要性が強く認識され、政策提言「超高齢社会における先制医療の推進」の立案に至った。本日は、同コンセプトの概要、及び関連する科学技術施策、今後推進すべきと考えられる研究開発戦略等を紹介したい。　＜先制医療とは＞ 一般に、糖尿病、心血管系疾患等の生活習慣病は、遺伝素因と環境要因の相互作用が長年にわたって起こり、疾患発症リスク因子が徐々に蓄積し、発症に至ることが知られている。一方、近年のライフサイエンス研究の急速な進展によって、科学的根拠に基づく遺伝素因およびバイオマーカー（血中等の生体由来物質、画像データ、ほか）を用いてハイリスク群を同定（層別化、個別化）し、それら疾患の発症を高い確率で予測することが徐々に可能になりつつある。先制医療とは、科学的根拠に基づいた疾患発症予測、そしてリスクに応じた適切な予防的介入を実施し、疾患（或いは重篤な合併症）の発症を予防するか遅らせようとする、これからの健康・医療のコンセプトである。疾患によって先制医療を実施すべき時期や方法論は異なると考えられるが、DOHaD 仮説で指摘されている疾患については、胎児、乳幼児からの適切な先制医療も重要であると考えられる。